

## 文学博士金倉田照君の「印度中世精神史」に対する授賞審査要旨

本書は著者の印度精神史の中の中世前期を論述したものであつて、全篇一〇章より成り、紀元前五〇〇年頃より紀元前後頃に至るまでの精神史の各方面を統一的に考察して叙述している。

古代において獨創性に富んだ印度精神が中世において独自の發展を遂げて、完全に印度精神を實現した經過を、先ず、スートラ文学の編成に徴する。スートラ文学に四種ある中、第一種、天啓の聖典すなわちヴェーダに基づく大規模にして公的な祭事を規定するシラウタ・スートラと、第二種、各家庭における小規模にして私的な祭祀儀礼を扱うグリファ・スートラと、第四種、広義の法を対象として纏めたダルマ・スートラとの三種が重要視せられる。第一種と第二種とは主としてバラモン階級の行うものであるが、同時にこれ等が全くインド人一般の精神生活の古代よりの様式を表わし、彼等の社会的個人的方面の一切である。インド人の生活は元來極めて宗教的であつたがために、すべてが宗教的に色づけられているが、バラモンは其の固有の宗教観によつて、祭祀儀礼が即ちその発現であるとして規定実行するのである。これ等の詳細な点が本書の第一章に於て闡明せられている。

天啓の聖典ヴェーダは絶対の權威を有するとせられるから、これを正確に維持し伝承することに努力が払われ、聖典中の言語の研究が起り、暗誦法、発音法、抑揚法の規定が現われて、音韻、語源、文法についての学的發達となり、古い時代としては珍らしいインド特有の言語哲学を構成するに至つたが、第二章の「言語の哲学的考察」は此の方面の研究であつて、当時の文法学の著しい發達の結果は現代までも支配するものであり、言語哲学はバラモンの哲

学思想と結びいてインド教中にも生きている点が明らかにせられている。

スートラ文学の第四種ダルマ・スートラは聖典ヴェーダにも基づくが、尚多く古聖人の記憶、教護ある人々の行状、各地方地方の種族及び家族の風習慣例、並びに国民詩たる大史詩の内容に由来し、これ等を集めて幾多の法典となつたものであるから、古来のインド・アリヤンより伝わつたものまでも入つて、インド人の風俗習慣、法律、倫理、国家的社会的個人的の生活一般の規定を表わし、それをバラモンの以て一貫せしめて、中世社会の状況を明らかにすを得る点を論究したのが第三章の趣意である。法典は殆んど歴代、編纂著作せられ、近代のインド統治の典拠となり、又、広くインド文化の及んだ諸国をも支配しているが、インドとしては中世の精神生活の基調となつている点が究明せられている。

然し、精神史としては、以上の諸方面に劣らず重要なのは中世の哲学思想の発展の方面である。古代のウパニシャッドに於ける哲学が中世的に発達して新たに数種のウパニシャッドの著作が現われたが、著者はこれを中世初期と中世後期とに分つて内容思想の変遷を闡明する。初期に属するものに現われた哲学思想は、古代の哲学が常に一種魔法的な觀念をただよわせ神秘的たるを免れていないのに反して、極めて平明な知性の世界に立ち、統一ある思弁を展開し、それを詩形に約して表現し以て諷誦に便しているが、特色としては最高至上の唯一神を認め、これと世界の關係の解釈において細説を試み、後世発達の源をなし、同時に新たな冥想方法としてのヨーガが重要視せられ、この方法によつて最高神の直観に到達せんとする。又中世後期のウパニシャッドにおいてはヨーガの実修が特に重んぜられ、一方においては厭世觀が濃厚となつてインド的特色を現わし、他方においては聖音オームの靜觀によつて忘我の

境に入り、そこから更に三神一体観が提唱せられて現代インド教の重要説となつている。これ等の系統、その発展を第四章「哲学思想の転換」において明確になしている。

インドは古来一般に歴史の記録を有していないから、正確な年代が知られないが、紀元前三二六年アレクサンデル大王がインドに侵入した前後から、年代は比較的正確に知られるに至つた。大王の侵入は中央インドにおいてチャンドラグプタ王のマウルヤ王朝創立を来し、この王朝下にインドは初めて統一せられ、制度も整うて国家組織にも見るべきものが出現した。従つて一般文化も発達し、バラモンの宗教以外、仏教、チャイナ等の諸宗教が盛んになつた。これ等の文化の状況、一般精神生活の状勢を明らかにするのが第五章の課題であつて、精細に論述せられている。進んで、マウルヤ王朝第三代のアシールカ王は父祖の業を承けて更に版図を拡張し、殆んど前後に例のない大版図を統治したが、王は其の詔勅を石に刻して一般に知らしめ、王の起居、治国の要道を示すと同時に衆人に道德的宗教的生活をなすべきを教え、躬ら範を示して徳化を及ぼした。著者はこれ等多数の刻文を縦横に用いて、王に関する行蹟、その奉じた道德宗教等を詳細に論述し、王の仏教信仰、仏教精神による政治、仏教伝道の史実が精神史上新方面を開示したことを叙した。これが第六章の要領である。

最後の四章はインド人の大多数によつて愛誦せられ、國民詩とも称せられる二大叙事詩の内容についての論述であるが、初めの第七章には二詩の如何なるものなるかを明らかにし、その精神史的の意義を尋ね、第八章は特に二詩中の一たる大史詩マハーバーラタのインド精神史上において重要なもので、特にその神観において大なる意義あることを示し、第九章はマハーバーラタの中の一編をなすバガヴッド・ギーターの内容とその意義とを精査している。バガヴ

ド・ギーターは単行せられていて広く流行し、現今インドの教養ある人士にはすべて暗誦せられ、彼等の精神生活に重大な要素をなしているから、著者は其の内容を検討し、これを歴史的に又宗教的に考究して明快に論述している。第十章は哲学の面からの大史詩の考察であつて、前来の攷究を承けて一層の發展を遂げ、而もそれが現代インド人の世界観、人世観の基調となつている点が明瞭にせられている。

以上約五〇〇年間のインドの中世精神史の全体を述べて、組織的に概観した所に著者の大なる努力と明らかなる洞察力とが示されている。由来、インドの思想生活に関しては年代的考察の資料の不備のために、幾多先人の著述においても、整然たる体系の下に全体の叙述をなしているものはほとんど全くその例が無い。

この間にあつて著者は自己の文献学における豊富な知識を駆使すると共に、博く諸家の専門的研究の成果を参照し、最も穩健且つ適切な論述によつてかかる欠陥を充たし、而も一事をもゆるがせにしない慎重な態度を以て本書に纏め、随處に優點を示しているのは学界を裨益するところ甚大である。